

栄養教諭と担任が共働する小学校家庭科授業の提案

—性格特性的「強み」を用いて「個別化した自立」を目指す
小学校6年生の年間指導計画—

青木 孝文*1 合田 喜賢*2 塩津 敦子*1

要 旨

学習指導要領では、「生きる力」を向上させ、個性を磨き「自立」を目指しているものの、児童・生徒の表現が「画一的」に陥る「ずれ」が存在する。この「ずれ」を埋めるには、自身の嗜好（強み）に合わせて社会生活を営みよりよく生きる、well-beingの達成が重要ではないか。「自立」とwell-beingのどちらも達成する手法として、性格特性的「強み」を用いた学習の個別化と、栄養教諭と担任が共働する小学校6年生の家庭科を提案したい。実社会に近い「家庭科」で、多様な他者との共働作業を、学んできた「知識や技能」を用い、「思考力・判断力・表現力等」を発揮し、トライアンドエラーを繰り返し、粘り強く取り組むことで、「学びに向かう力、人間性等」を育む。その過程で、自身の「強み」の活用と育成を行うことで、well-beingが達成され、「個別化した自立」に近づき、個性豊かで素敵な人生を歩んでいけることを期待する。

Keywords : 自立, well-being, 性格特性的「強み」, 栄養教諭, 家庭科
independence, well-being, character strengths, nutrition teacher, home economics

1. 背景

「生きる力」とは、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられる」力である（文部科学省,2017b）。言い換えると、「自立」を促すことが重要と考えられる。

渡辺（2004）は、日本の教育で重要視されてきたことは共感力であるとし、社会共通の価値を内面化する過程が重視され、その一端が社会マナーの遵守の高さに現れていると考えている。さらに、「自立」や「自生」の心を養成し、個性を伸ばす教育も行われていることも示されている。しかしながら、共感力を重要視する教育の結果として児童・生徒たちの表現が、画一的な紋切り型に陥るといふパラドックスが生じていることを指摘している。他方、アメリカの教育で重要視されてきたことは、決断力と分析力であるとしている（渡辺雅子, 2004）。多くの情報から因果関係を抽出し、分析し、最終的な決断に用いるということである。予測困難な社会問題に対し、情報を精査し、解決方法を探り、よりよい社会の創り手となる力とも考えられる。一方アメリカの教育では、道徳と人格教育が衰退しているという批

*1 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

判もあるとのことである。以上のように教育手法には、日米で一長一短があるが、少なくとも日本の現状を見る限り、「自立」を促しているものの、「画一的」な表現に陥る「ずれ」を埋めることが求められると言える。特に重要なことは自身の考えをもって提案することだ。すなわち「自立」した状態が、「生きる力」の向上した状態であり、その養成には、自身の嗜好（強み）に合わせて社会生活を営みよりよく生きるという、well-beingの達成が重要ではないだろうか（図1）。

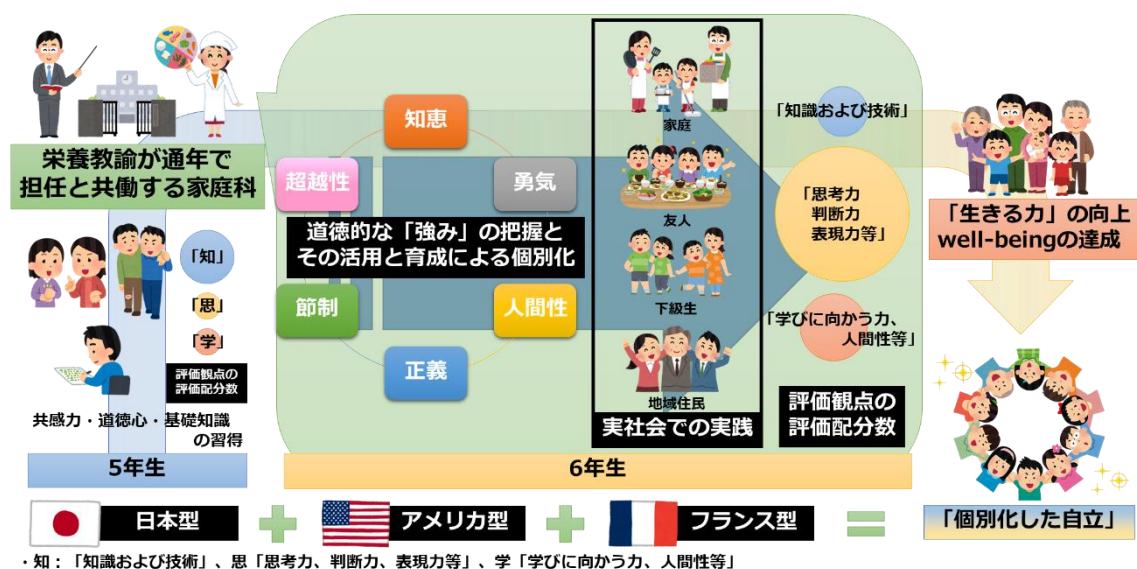


図1：本提案の目指す「食」と「栄養」を介した、小学校家庭科における5年生から6年生への発展と「個別化した自立」の達成計画

我々は、栄養教諭が通年で担任と共働し、「食」あるいは「栄養」を介し、well-beingの達成を目指した小学校5年生家庭科の年間指導計画について提案を行った(青木孝文ら, 2023)。なぜならば、「食」あるいは「栄養」がwell-beingを構成する5つの要素^{注1}を満たすことができ、それを実際の生活ですぐに実践可能な「家庭科」が最も適しているためである。さらに、栄養教諭が担任と共働すること、すなわち、協力して働く「協働」というよりも、多くの違いを認識・理解しつつも、それぞれが尊重され、対等な関係で働くような「共働」により、専門性や多様性のある授業の担保と担任の負担軽減という、教育現場が抱える問題の解決策になりうるためである。一方、1年間だけの計画では、well-beingの達成は困難である。また、実際の社会、すなわち家族、友人、地域の人々、下級生という異なる知識、技術、経済状況、価値観等を抱えた相手と向き合うには、その経験と捉え方、そして多様な価値観を受容できるための感覚が必要と言える。さらには、自身の状況をも受け入れ、それをどのように自分らしく発展させwell-beingを達成するか、すなわち「個別化した自立」に向かうことが最も重要と言える（図1）。

これらの現状を踏まえ、課題として残されていた小学校6年生の家庭科をモデルに、自身の「強み」の把握と育成、実社会を想定した多様な他者との共働作業を通して、小学校5年生からの発展とwell-beingの達成による「個別化した自立」を目的とした年間指導計画を提

案したい。本計画を以下に示す。

2. 小学校 6 年生をモデルにした栄養教諭と担任が共働する家庭科年間指導計画

2.1 計画概要

栄養教諭と担任が共働する小学校 6 年生家庭科の年間指導計画を実施学期ごとに、題材・内容、該当する学習指導要領の内容項目、到達目標、評価観点、評価方法に分けて表 1 にまとめた(文部科学省, 2017a)。本計画は、小学校 5 年生家庭科の年間指導計画で示した「食」と「栄養」を中心とした視点で「家庭科」の指導範囲を網羅するだけでなく、自身の「強み」の把握と、その「強み」の活用と育成を well-being の達成と関連付け、家族や友人に加え、下級生と地域の方々との交流という実社会での実践から発展させ、いかに well-being を達成し「自立」に導くか、ということを目的に作成した。5 年生から 6 年生への発展的内容を表 2 に示す。

2.2 題材・内容と到達目標

6 年生では学習指導要領に基づきつつ、5 年生の基礎的内容を応用的内容に発展させ、「自立」へ導ける題材・内容とした(表 1, 2)。まず、「自立」の個別化を図る基となる性格特性的「強み」の把握を、1 年間の最初の授業時に行う^{注2}。性格特性的「強み」は、well-being の構成要素を支える個人の特性であり、24 に分類される(Peterson, 2012 ; Seligman, 2014 ; 大竹恵子ら, 2005 ; 表 3)。この「強み」から自身の特性を把握し、「強み」の活用と育成という観点を加え、自己評価と目標設定資料であるポートフォリオを発展させる。次に、自由度が高く、個々人の主体性が生き、実社会の接点となるような、家庭での家事を行う項目、友人たちとの共働作業を行う項目、最高学年として 1 年生の指導にあたる項目、地域の方々との交流を行う項目を各所に配置した(表 1)。「強み」を授業で活用し育成しながら、実生活でも応用できる契機を提供している。さらに、到達目標と評価観点については、「知識および技術」の項目を減少させ、「思考力・判断力・表現力等」の項目を増加し、学んできたことを生かし自身で考え実践することが必要な計画となっている(表 2)。加えて、ICT 機器の活用に関しても発展させ、情報リテラシーの理解、共働作業における日程管理や問題点、注意点の共有、タイムラプス動画の活用、ICT 機器の使用の必要性の判断についても考慮できることとした(表 1)。

表1-1：小学校6年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(1学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価項目	評価方法
4	2	●家庭科の学習を振り返ろう2 ・家庭科の学びの全容の復習と6年生での実施項目について提示する ・6年生では、5年生の自己評価から得意、不得意が判別できる ・性格特長的「強み」テストを行い、自身の「強み」の把握と、その強みと自身の生活レベルの成長計画を立て、ポートフォリオに加える ・グループ内での話し合いを通して、再検討する ・web上で双方向に一部閲覧、一方向にリアルタイムで編集できるよう共有設定を行い、自己評価や同級生の状況を確認し、アイデアや価値観の共有と多様性の受容の下地を養うことに加え、情報リテラシーの理解の深化と実践を行う	A~C	①性格特長的「強み」テストを行い、自身について理解を深める ②その内容をポートフォリオに盛り込み、従来からの全体像の確認、現状評価と今後の課題、改善策について検討する	学	・ポートフォリオ
	2	●SDGsを考えよう3 植物を育ててみよう1 ・本項目は1年生と共に授業を行う ・夏野菜の種類、育て方、必要物品を事前に調べておく ・1年生と共に夏野菜を育てる計画書を作成する ・入学して間もない1年生との共働作業を通して、最高学年の自覚を持ち、下級生との関わりを持つ大切さを学習する	A(1)~(3) C(2)	①下級生とのより良い関わりについて理解を深め、実践する	思	・行動観察(話し合い・発表) ・計画書
	2	●SDGsを考えよう4 植物を育ててみよう2 ・作成した計画書を用いて、土づくり、種まきを行う ・土には、5年生で作成した堆肥を用いる ・各グループ担当の1年生と連携する ・水やり担当やその日程管理、植物の成長状況、注意事項や問題点をICT機器を活用し、設定・記録・共有する ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A(1)~(3) C(2)	①低学年の児童とのより良い関わりについて、実践、評価、改善を行う	思	・行動観察(農作業) ・計画書 ・ポートフォリオ
	2	●栄養を考えてみよう3 給食について考えてみよう ・どのような基準に基づいて作られているかを知る (栄養面、嗜好面、社会面(行事食・郷土料理、費用など)、衛生面など) ・学んできた栄養の知識と照らし合わせを行う ・普段の給食摂取時に、これらの基準を意識できるようになる	A(1), (2) B(1)~(3)	①食事の役割を、栄養面、嗜好面、社会面(行事食・郷土料理、費用など)、衛生面から考え、理解を深める	知	・行動観察(話し合い・発表) ・確認テスト
5	2	●栄養を考えてみよう4 栄養と食生活を考えてみよう ・自身の食生活について記録を行い、持参する ・食生活は栄養に限らず、嗜好面、社会面でも重要なことを意識する ・自身の食事を自己評価し、改善点を考える ・グループ間で意見交換し、時間や費用も含めて、現実的な食事について再度検討する	A(1), (2) B(1)~(3) C(1)	①食事の役割、栄養を考えた食事について、嗜好面、社会面(時間や費用)も含めて理解を深め、自身の食事の評価し、改善点を考える	思	・行動観察(話し合い・発表) ・食事記録
	2	●栄養を考えてみよう5 腸内細菌と食生活について ・社会的なトピックスである腸内細菌に関する現状について知る ・腸内細菌に影響する食生活について、プレバイオティクス、プロバイオティクス、シンバイオティクス、欧米食の影響、便スケールなどについてグループに分かれて、図書・ICT機器を用いて調べる	A(1), (4) B(1), (3)	①栄養を考えた食事について、理解を深める	知	・行動観察(話し合い) ・スライド
6	2	●栄養を考えてみよう6 腸内細菌と食生活について2 ・腸内細菌に影響する食生活について調べたことについて発表を行う	A(1), (4) B(1), (3)	①栄養を考えた食事について理解を深め、その内容を表現する	思	・行動観察(発表) ・スライド
	2	●栄養を考えてみよう7 腸内細菌と食生活について3 ・腸内環境を正常に保つ食生活について考える ・食物繊維と発酵食品の摂取が重要であることを知る ・発酵食品について、定義、種類、作り方について調べ発表する	A(1), (4) B(1), (3)	①栄養を考えた食事について理解を深め、その内容を表現する	思	・行動観察(話し合い・発表)
	2	●発酵食品を作ってみようーヨーグルトと漬物ー ・ヨーグルトとザワークラウトについて、レシピを提示する ・作成時の注意点について、発酵の原理から学びを深める ・グループでレシピを工夫し、1年生と協力した作成計画を立てる(ヨーグルト：使用する菌種、ザワークラウト：育てた野菜の使用)	A(1)~(4) B(1)~(3)	①栄養を考えた食事について理解を深め、その知識を実践し計画を作成する	思	・行動観察(話し合い・発表) ・作成したレシピ
7	2	●発酵食品を作ってみよう2ーヨーグルトと漬物ー ・本項目は1年生と共に授業を行い、計画に基づき、グループで実践する ・育てた野菜を用い、1年生に指導しながら簡単な調理を行う ・発酵具合が確認できるように透明の器具を用い、教室で発酵を行う ・温度、湿度、食品変化等を動画(タイムラプスなど)や写真で記録する	A(1)~(4) B(1)~(3)	①栄養を考えた食事について理解を深め、その知識を実践する	思	・行動観察(調理) ・作成したレシピ
	2	●発酵食品を作ってみよう3ーヨーグルトと漬物ー ・完成した発酵食品を試食する ・併せて各グループで経過の記録をまとめる ・1年生にも、役割を与えて全員で共働作業を行う重要性を理解する ・作成した記録は掲示し、作成物の違いから更なる学びにつなげる ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A(1)~(4) B(1)~(3)	①栄養を考えた食事について理解を深め、実践した結果を評価し、改善力所の検討、結果をまとめ、考えを表現する	思	・行動観察(話し合い) ・掲示物 ・ポートフォリオ
夏休み		●夏休みの宿題：夕ごはんを用意してみよう ・コンセプトを栄養面、嗜好面、社会面から考え、夕ご飯を用意する ・外食、中食、自作は問わない ・必要な時間と経費を算出できるように記録する ・ICT機器で画像や動画の記録を行う ・発表できるようにスライドテンプレートに当てはめる	A(1)~(4) B(1)~(3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養面、嗜好面、社会面を考慮し、実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける	思	・スライド内容

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

表1-2：小学校6年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(2学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価項目	評価方法
9	2	<ul style="list-style-type: none"> ●夕ごはん報告会 <ul style="list-style-type: none"> ・掲示してあるスライドに対し、栄養面(発酵食品等含む)、嗜好面、社会面(費用や時間)、衛生面について総合評価を行い、上位3献立を選出し、ICT機器を用い投票を行う ・発表に関しては、教員からの特別選出枠を設け、優秀以外の個人の価値観の重要性を提示できるように配慮する ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する ●調理に必要な衣類を作成しよう2 	A(1), (2), (4) B(1), (3) C(1)	①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、実践内容をまとめ、表現する ②1学期の成果である夏休みの宿題を通して、ポートフォリオを活用し自己評価を行う	学	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド内容 ・ポートフォリオ
	8	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な縫い方について復習し、ボタンの付け方を学習する ・学習した内容をエプロンの作成で実践する ・作成したエプロンは家庭あるいは学校での調理・配膳時に使用する ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する 	A(1), (2) B(4), (5)	①食生活に必要な布製品の作成を通し、課題設定し、実践する	思	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察(裁縫) ・作成物 ・ポートフォリオ
11	2	<ul style="list-style-type: none"> ●SDGsを考えよう5-地産地消と郷土料理について- <ul style="list-style-type: none"> ・地元で行われている地場産業について、理解を深める ・価格だけではなく、社会的、環境的な情報も踏まえて消費生活を営む必要があることを知る ・自身の住む地域の郷土料理について、理解を深める ・郷土料理と地場産業との関係について知ること、文化的な背景の理解を深める 	A(1), (2) B(1), (2)	①食事の役割について、理解を深める	知	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察(話し合い・発表)
	2	<ul style="list-style-type: none"> ●快適な日常生活を考えよう4 掃除名人になろう <ul style="list-style-type: none"> ・食中毒を防ぐ清掃から発展した内容である ・家庭および学校で、普段の掃除において、掃除が行き届いていない箇所を調査することで、大掃除の大切さを理解する ・調査結果から、掃除が不十分な箇所について、清掃を行うための方法を考え、清掃計画を作成する 	A(1), (2) B(6)	①整理・整頓や清掃の仕方について、理解を深める	知	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察(話し合い・発表) ・清掃計画書
12	2	<ul style="list-style-type: none"> ●快適な日常生活を考えよう5 掃除名人になろう2 <ul style="list-style-type: none"> ・本項目は1年生と共に授業を行う ・計画に基づき清掃を行う ・1年生に対しては、清掃方法の観察・指導を行う 	A(1), (2) B(6)	①整理・整頓や清掃の仕方を考え、適切な住まい方を工夫する ②低学年の児童とのより良い関わりについて実践する	思	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察(清掃)
	2	<ul style="list-style-type: none"> ●快適な日常生活を考えよう6 掃除名人になろう3 <ul style="list-style-type: none"> ・本項目は1年生と共に授業を行う ・地域の方と連携し、公民館や公園などの公共施設設備について、清掃活動を行う ・地域の方と関わりを持つことで、社会生活が家族や友達だけでは成り立たないこと、その関わりの大切さについて理解を深める ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する 	A(1)~(4) B(6)	①整理・整頓や清掃の仕方を考え、適切な住まい方を工夫する ②低学年の児童、地域の人々とのより良い関わりについて実践する	思	<ul style="list-style-type: none"> ・行動観察(清掃) ・ポートフォリオ
冬休み		<ul style="list-style-type: none"> ●冬休みの宿題：家庭の仕事を手伝おう <ul style="list-style-type: none"> ・学習した内容を活かし、家庭の仕事を手伝う ・調理では、クリスマス、年越し、お正月などの行事食作成 ・裁縫では、雑巾の作成やボタン付けなど ・清掃では、家の大掃除など ・自身が得意なことについて、実施しその内容について、必要に応じICT機器を活用し、まとめる 	A~C	①学んだ内容を活かし、家事について、計画に基づき実践、評価・改善し、課題解決力を身に付ける	思	<ul style="list-style-type: none"> ・スライド内容

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

2.3 評価

「指導と評価の一体化」の参考資料(文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター, 2020)とその解説(丸山早苗, 2020)を用いて、評価観点と評価方法を作成した。小学校5年生の家庭科の年間指導計画と同様に、自己評価(主観的評価)を組み込んだ。重要なことは、上坂と中森が示している生活のレベルを自己評価する場合、「基本的な生活」レベルから「よりよい生活」レベルに発展しているかを確認することである(上坂美紀ら, 2020)。このレベルの例を挙げると、「食生活」では、「基礎的な生活」レベルは、栄養を考えた食事、米飯とみそ汁の日常食の調理、「よりよい生活」レベルは、栄養バランスを考えた1食分の献立の工夫、楽しく食事をするための工夫とされている。注意すべき点としては、多様性の受容である。子どもたちの「強み」と、発展させる項目とそうではない項目との自己評価を分析し、画一的な指導を行わない、すなわち全てのレベルを均質的に発展させ

なくてもよい、という認識のもと指導を行うことである。

表1-3：小学校6年生家庭科における栄養教諭が通年で担任と共働する年間指導計画(3学期)

月	時数	題材・内容	内容項目	到達目標	評価項目	評価方法
1	2	●家庭の仕事報告会 ・家庭科の内容のまとめである実生活での運用を発表する ・掲示してあるスライドに対し、工夫面、実践回数、質について総合評価を行い、上位3者を選出し、ICT機器を用い投票を行う ・発表に関しては、教員からの特別選出枠を設け、優秀以外の個人の価値観の重要性を提示できるように配慮する ・上位4名+特別枠1名の児童に、その内容を10分程度で報告してもらい ・ポートフォリオを用い、自己評価を行い今後の課題について記録する	A~C	①学んだ内容を活かし、家事について実践内容をまとめ、表現する ②2学期の成果である冬休みの宿題を通して、ポートフォリオを活用し自己評価を行う	学	・スライド内容 ・ポートフォリオ
	2	●調理をしてみよう4-郷土料理について- ・事前に郷土料理について調査を行っておく ・地産地消を意識し、作ってみたい郷土料理をグループで選ぶ ・そのレシピについて調査を行う ・実際の調理計画を立てる	A(1)~(4) B(1)~(3)	①栄養や文化を考えた食事について理解を深め、その知識を実践し計画を作成する	思	・行動観察(話し合い・発表) ・作成したレシピ
	2	●調理をしてみよう5-郷土料理について- ・調理計画に従い、郷土料理を作成する ・実際の経費および時間について記録を行う ・計画通りだったこと、計画にそぐわなかったこと、どう対処したか、今後の改善計画についてレポートを作成する ・過去の調理実習と比較し、自身の成長を評価する。	A(1)~(4) B(1)~(3)	①栄養や文化を考えた食事について理解を深め、その知識を実践し計画を作成する	思	・行動観察(調理) ・レポート
2	4	●卸売り市場に行ってみよう ・2年間のまとめとして、衣食住、消費、環境への配慮を卸売市場を通して実感することで、今後の社会生活を送るうえで必要な仕組みの理解と自身の捉え方を深めるとともに、地域連携事業の一環として実施する	A~C	①2年間のまとめとしての課外活動を行い、家庭生活、衣食住、消費、環境への配慮について、実践的に学びを深める	知	・行動観察(見学)
	2	●卸売り市場見学報告会準備 ・各グループで印象に残った内容について、自身の生活との関わりを含めて、相談しまとめる ・発表できるようにスライドテンプレートに当てはめる	A~C	①見学した内容の中で、自身の生活との関わりから、課題設定し、解決方法立案、実践計画を立てる	思	・スライド内容
3	2	●卸売り市場見学報告会 ・各班で印象に残った内容について発表を行う ・発表後に、過去の給食センター見学の際の内容と比較し、自身の成長を評価する	A~C	①見学した内容の中で、自身の生活との関わりについて考えをまとめ、表現する	思	・スライド内容
	2	●家庭科の学習を振り返ろう3 ・2年間の学びを通して自身が家庭の仕事で何がどこまでできるようになったか、何ができていないかを評価しまとめる ・「強み」の成長状況から「個別化した自立」が達成できているか評価するとともに、今後のwell-being計画をまとめる	A~C	①1年間の学びを、ポートフォリオを活用し自己評価を行う	学	・ポートフォリオ

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

3. 考察

「強み」とは、「人が活躍し、最善を尽くすことを可能にさせる特性」と定義され、well-being, レジリエンス, 抑うつなどの精神的健康との関連が示されている(阿部望ら, 2016)。中でも、性格特性的「強み」は、6つの普遍的な美德(virtues:「知恵と知識」,「勇気」,「人間性」,「正義」,「節制」,「超越性」)に分類される24の「強み」から成る(Peterson, 2012; 表3)。240個の質問に回答することで、自身の特徴的な「強み」として上位5つが抽出される^{注2}。これらの「強み」は、well-beingを構成する5つの要素を支えているため、自身の特徴的な「強み」を認識し、活用することでwell-beingの達成に近づくのである(Seligman, 2014)。特に、弱点を修正させるのではなく「強み」に働きかける点では、学習指導要領と通ずる部分がある。また、特徴的な「強み」の活用は、自己肯定感や高揚感の発揮、意欲・活力の向上、個人的な課題の創造と追及など、「自立」の主體的な発展に重要な要素を向上させるのである。さらに、性格特性的「強み」は道徳的に価値のあるものとされているため、道徳心の高い日本人には受け入れやすいと考えられる。したがって、この「強み」の活用は

「画一的」になりがちな日本の教育の中で、明らかに学習内容を「個別化」できると言え、従来からの「自立」との「ずれ」を埋めることが可能な手法として本計画の中心と考え

表2：小学校家庭科5年生から6年生への発展例

内容項目		題材・到達目標	
		5年生	6年生
A 家族・家庭 生活	(1) 自分の成長と 家族・家庭生活	●座学 ・家庭科の学習を始めよう～家庭生活の仕事とは～ ①家庭生活の全体像の把握 ②目標設定と自己評価できる資料を作成する	●座学 ・家庭科の学習を振り返ろう ①「強み」テストを行い、自身について理解を深める ②その内容をポートフォリオに盛り込み、全体の確認、現状評価と今後の課題、改善策を検討する
	(2) 家庭生活と仕事	●座学 ・食事はどうやって作られるか調べてみよう ①家事としての食事について理解を深める	●座学 ・栄養と食生活を考えてみよう ①食事の役割、栄養を考えた食事について、理解を深め、自身の食事の評価し、改善点を考える
	(3) 家族や地域の 人々との関わり	●座学 ・SDGsを考えようーごみの分別ー ①食生活の決定因子と知識や社会との関わりについて理解する	●計画作成 ・SDGsを考えようー植物を育ててみよう1ー ①低学年の児童とのより良い関わりについて理解を深め、実践する
	(4) 家族・家庭生活 についての 課題と実践	●実践 ・夏休みの宿題：朝ごはんを用意してみよう ①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、改善案に基づき実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける	●実践 ・夏休みの宿題：夕ごはんを用意してみよう ①学んだ内容を活かし、家事としての食事の作成について、栄養面、嗜好面、社会面を考慮し、実践、再評価改善し、課題解決力を身に付ける
B 衣食住の 生活	(1) 食事の役割	●座学 ・食生活の決め手は何か考えてみよう ①食生活の決定因子と知識や社会との関わりについて理解する	●座学 ・栄養を食べてみようー給食について考えてみようー ①食事の役割を、栄養面、嗜好面、社会面(行事食・郷土料理、費用など)、衛生面から考え、理解を深める
	(2) 調理の基礎	●調理実習 ・炊飯、だしの取り方、味噌汁の作り方 ①調理をする意味について理解を深める	●調理実習 ・発酵食品を作ってみよう2ーヨーグルトと漬物ー ①栄養を考えた食事について理解を深め、その知識を実践する
	(3) 栄養を考えた 食事	●座学 ・体に必要な栄養って何だろう ①食事から栄養について理解を深める	●発表会 ・発酵食品を作ってみよう3ーヨーグルトと漬物ー ①栄養を考えた食事について理解を深め、実践した結果を評価し、改善力所の検討、結果をまとめ、考えを表現する
	(4) 衣服の着用と 手入れ	●座学 ・調理に必要な衣類や道具を考えてみよう ①衣類の働き・役割について、食生活の視点から考え、実践的に理解を深める	●裁縫 ・調理に必要な衣類を作成しようーエプロンー ①食生活に必要な布製品の作成を通し、課題設定し、実践する
	(5) 生活を豊かに するための布を 用いた製作	●裁縫 ・調理に必要な衣類を作成しようーハンカチー ①食生活に必要な布製品の作成を通し、課題設定し、実践する	●裁縫 ・調理に必要な衣類を作成しようーエプロンー ①食生活に必要な布製品の作成を通し、課題設定し、実践する
	(6) 快適な住まい方	●座学 ・給食作成の環境基準から快適な日常生活を考えよう ①快適な住まい方について、給食作成基準の視点から、実践的に理解を深める	●実践 ・快適な日常生活を考えようー掃除名人になろう2ー ①整理・整頓や清掃の仕方を考え、適切な住まい方を工夫する ②低学年の児童とのより良い関わりについて実践する
C 消費生活 ・環境	(1) 物や金銭の 使い方と買物	●座学 ・家事に必要な時間と費用を計算してみよう ①消費生活について食事の作成から理解を深める	●座学 ・栄養と食生活を考えてみよう ①食事の役割、栄養を考えた食事について、嗜好面、社会面(時間や費用)も含めて理解を深め、自身の食事の評価し、改善点を考える
	(2) 環境に配慮 した生活	●座学 ・SDGsを考えようー生ごみから肥料を作ろうー ①社会生活を持続するためのSDGsについて、家庭生活から理解する	●実践 ・SDGsを考えようー植物を育ててみよう2ー ①低学年の児童とのより良い関わりについて、実践、評価、改善を行う
主となる 評価観点の 合計数	「知」	15	5
	「思」	10	17
	「学」	4	4

・評価観点における各文字は次の言葉を示す。知：「知識及び技能」、思：「思考力、判断力、表現力等」、学：「学びに向かう力、人間性等」

表3-1：性格特性的「強み」の分類とその活用例①

美德の分類	No.	「強み」	説明	活用例
知恵	1	独創性	物事に取り組むとき、新しく、創造的なやり方を考える。	レシピ通りの味付けにひと手間加え、オリジナルレシピを作る
	2	好奇心	あらゆるものごとに興味を持ち、面白く感じ、探求と発見を好む。	テレビで紹介された料理を、作ってみる、食べに行く
	3	向学心	スキルや知識をマスターし、すでにある知識の上に新たな知識を体系的に積み重ねる。	骨の成長に必要な栄養素について、Ca以外にもビタミンDやK等代謝の関係から理解を深める
	4	判断力	物事を考え抜き、吟味する。あらゆる証拠を公平に比較検討する。	植物を育てる計画を立てた後、本や教員、農家の人々の意見をもとに再度練り直す
	5	見通し	他人に対して賢明なアドバイスを与え、自分自身にとっても意味を成すような世界観を持つ。	下級生が友人を傷つける発言をした際に、適切かつ心に響く助言を行い、それが同級生にも伝わる
勇気	6	誠実さ	自分を飾らずに表現し、自分の気持ちや行動に責任を持つ。	発表の際に、常識的な考えと違ったとしても、自分の思いを正直に表現する
	7	勇敢さ	脅威や試練、困難、苦痛にひるまない。たとえ嫌われても信念にしたがって行動する。	班員の多くが仲間外れの人を作ろうとした際に、少数派であっても、その間違いをたただす
	8	勤勉	始めたことをやり遂げ、そのことに喜びを感じる。	発酵食品作成に際して、腐敗したとしても、うまくいくまで、トライし続ける
	9	熱意	人生にワクワクしながら臨む。中途半端に対処しない。人生を冒険として生きている。	調理や発表など、初めてのことであっても全力を注ぎ、ワクワクしながらチャレンジする
人間性	10	親切心	他人のために尽くし、助け、世話をしあげる。	下級生や地域の方が困っていたら、積極的に手を差し伸べる
	11	愛情	他人との親密な関係に価値を置き、双方報われる関係にある。他人との距離が近い。	家族や友人など親しい人と過ごす時間を大切に、その人たちのために多くの時間を使う
	12	社会的知能	他人や自分の心の動きや気持ちに神経が行き届き、何が他人を動かすかを熟知している。	話し合いで意見の不一致により不和が生じた際に、お互いの気持ちを汲み取り、解決へ進める

・ Peterson, 2012 ; Seligman, 2014 ; 大竹ら, 2005より作成し、活用例は、説明から考えられるものとして著者が作成した。

表3-2：性格特性的「強み」の分類とその活用例②

美德の分類	No.	「強み」	説明	活用例
正義	13	公平さ	すべての人を同等に扱う。 私情を交えることで他人に対する判断が偏らない。	人の好き嫌いよりも、正しいかどうかを話し合いの結論として優先する
	14	リーダーシップ	グループ活動を計画し、グループを励まし、良い関係を助長し、計画の実現を見届ける。	班の調理計画を実現できるように、声掛けやミスのフォロー、気持ちを盛り上げたりする
	15	チームワーク	グループの一員としてよく働き、グループに忠実で、自分の分担を引き受ける。	リーダーを率先してサポートし、グループで与えられた役割を十二分にこなす
節制	16	寛容さ 慈悲心	間違いを犯した人を許す心を持ち、復讐心を持たない。	いじわるされても、仕返しをせず、許す
	17	慎み深さ 謙虚さ	自分の業を自慢せず、注目を浴びようとしめない。過剰に自分が特別であると考えない。	投票で、報告会の発表者に選ばれたとしても、過度に自慢しない。
	18	思慮深さ	自分の選択について用心深く、過度の危険を冒さない。 後悔する言動をとらない。	カッとなっても手を出さない、暴言を吐かない
	19	自己調整 自制心	自分の気持ちや行為を調整する。 規律正しい。 自分の食欲や感情を統制できる。	規則正しい生活を続ける 提出物の期限を守る 遅刻をしない
超越性	20	審美眼	人生のあらゆる領域において、美や卓越性や優れた能力を認め、それらを高く評価する。	苦手とする人が素晴らしい意見や発表を行った場合でも、純粋に感動したことを伝える
	21	感謝	良い出来事に気を留め感謝し、感謝を表すための時間を持つ。	給食センターの見学に際し、お礼を言うだけでなく、感謝の手紙を送る
	22	希望	未来に期待して、それが達成されるよう努力する。 良い未来が訪れると信じる。	報告会で、投票による発表者に自分も選ばれるために、課題へ全力で取り組み、その結果に期待する
	23	ユーモア	笑ったりからかったりすることを好み、他の人を笑顔にする。 物事の明るい面を見る。	自己紹介ギャグを考えて、実践し、笑いをとる
	24	精神性	人生の意味について一貫した信念を持ち、その信念に従って行動する。	挨拶が大事だと考え、毎日元気に挨拶を行う

・ Peterson, 2012 ; Seligman, 2014 ; 大竹ら, 2005より作成し、活用例は、説明から考えられるものとして著者が作成した。

ている。「強み」の活用方法は、その分類とともに実践例として表3に示す。

一方、「個別化」が進むことで予想される変化としては、「個人の権利と自由が重視される」アメリカ型のスタイル（渡辺雅子，2021）への移行である。これは、日本の重要視してきた「共感力」とは対立することや、「どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という「全体」を重視する「生きる力」とも齟齬が生じる。「生きる力」の考え方に近いスタイルとして、フランス型がある（渡辺雅子，2021）。フランスの教育では、個人の利益よりも公正で平等な社会の実現、共通善の追及を重視し、公共の利益を政治的な価値判断の基準とする共和国の価値観が重要視されている。この価値観は、どちらかと言えば「共感力」に近いと言える。しかしながら日本と両国の型の関係は、書く（国語）教育において逆転する。フランス型では、吟味と論証に重点を置くため、「個人」の体験や意見・感想は全く価値を持たないことに対し、アメリカ型では、「個人」の体験こそが最も貴重な資源となるのである（渡辺雅子，2021）。共感と読解を重要視している日本の教育には、アメリカ型がより近いと言える。以上のことを踏まえると、道徳心や共感力が高いものの、分析や決断が得意ではない日本人の我々は、自身の「強み」を活かし、「個人」の経験を積み重ね、その経験を糧に「全体」へ活かすような、日本型とアメリカ型とフランス型の折衷を進むことが「生きる力」の養成の糸口になるのではないかと考えている（図1）。そのための実践の場が、家族、友人、下級生、地域の方々との交流における共働作業である。その共働作業という、実社会とのつなぎの場において、学んできた「知識や技能」を用い、与えられた、あるいは自身で設定した課題に対し「思考力・判断力・表現力等」を発揮し、生活をよりよくする工夫を考案し、トライアンドエラーを通して粘り強く実践すること、そしてそれらを繰り返して「学びに向かう力、人間性等」を育む。その過程において、自身の「強み」を活用し、育成することで、「個別化した自立」が実現できると言える。

「強み」を用いた「個別化」教育を行うために最初の授業では、「強み」テストの実施から自身の「強み」を把握し、5年生の自己評価結果を基に6年生の成長計画を作成することとした（表1-1）。次に、その「強み」の活用場として、下級生との交流授業を設けた（表1-1）。下級生とともに植物を育てる内容であり、授業外でも連携が必要となる。同級生が互いに「強み」を把握することで、得意不得意の可視化に繋がり、下級生の指導という共通目標に向かって、より連携を高め、助け合うことを期待している。1学期中のほとんどが調べ学習、レシピ作成、発酵食品作成など、友人から下級生との共働作業をメインに展開している。「強み」の活用と育成、共働作業を通じて、児童自身の実践と役割の認識を繰り返して行うことで、「個」をお互いに認識し、そしてそれを「全体」のために活用する流れを定着させる（表1-1）。

2学期には、夏休み報告会、エプロン作成、郷土料理の学習を経て、再度「個人」の「知識および技術」について考える契機を与える（表1-2）。年末に向けて、掃除を介して下級生さらには地域の方々との交流を行うことで、「個人」から「全体」への展開を再度意識させる（表1-2）。

3 学期には、総まとめとして、家庭での内容を冬休み報告会、友人との共働作業を郷土料理の調理実習、地域の人々との交流内容である卸売市場の見学などを経て、自身がどこまで成長したかを過去の報告会、調理実習、5 年生での給食センターの見学との比較から考える（表 1-3）。最後の授業では、2 年間の学びを通してポートフォリオの仕上げを行い、「強み」の成長状況から「個別化した自立」の達成の確認と今後の well-being 計画をまとめることで、実社会への活用を促している。

本提案の実現可能性について検討するために、関連する先行事例について調査を行った。性格特性的「強み」を教育に用いた事例は、阿部と石川がまとめている（阿部望ら、2016）。日本での研究は数が少ないものの、「強み」を活用することで努力や可能性追求、ポジティブ感情、well-being の増加の成果がまとめられており、有用であると言える。また、個性を伸ばす教育は学習指導要領においてもその重要性が示されており、実施が奨励されている（文部科学省、2017b）。以上のことから、少なくとも本計画が学習指導要領から逸脱することがないだけでなく、むしろ、道徳的に価値のある性格特性的「強み」を実社会で実践することで「個別化した自立」を目指す計画は、学習指導要領における「生きる力」の養成を体現した内容と言え、十分に成果が期待できると言える。

4. まとめ

本稿は、自身の「強み」の把握とその活用と育成を、実社会を想定した多様な他者との共働作業で実践し、well-being の達成による「個別化した自立」を目指した栄養教諭と担任が共働する小学校 6 年生家庭科の年間指導計画を提案したものである。学習指導要領における「家庭科」の目標が達成できるように到達目標を設定し、評価観点の「知識および技術」の項目を減らし、「思考力・判断力・表現力等」の項目を増やすことで、「家庭科」の評価で重要な児童自身が計画・実践・評価を行う項目を増やしているだけでなく、それを共有できる工夫として ICT 機器の活用を盛り込んでいる。そして、「家庭科」全体における主な内容ならびに全体構造を 5 年生から 6 年生への発展させている（表 2）。小学校 5 年生での年間指導計画との決定的な違いは、児童たちの「強み」の把握からお互いの認識や思考の実態を視野に入れつつその活用と育成を、実社会を模した多様な他者との共働作業を通して、「生きる力」（well-being）を向上させ、最終的ゴールを「個別化した自立」としたことである。

学習指導要領では、「生きる力」の向上、「自立」、「自生」の養成を謳っているものの、現代の教育成果の評価は、大学入試に代表されるような知識中心で行われていないだろうか。その結果として、多様性あるいは専門性とは対極的な関係にある、均質的な知識の向上を行う必要に迫られているのかもしれない。この状況は、学習指導要領の作成や実運用の場所である社会が、歴史的背景や文化的な土壌も関与し形成されていることを考えると、容易に変化するとは考えにくい。今後、学習指導要領やその運用の場所である社会がどのような方向性で発展していくかは不明である。少なくとも我々ができることは、今、目の前の教育対象

者に対して、素敵な人生を歩める選択肢をより多く提供することであろう。そのためにも、実社会と密接な「家庭科」においては、より自由に、そして多様性、専門性を掘り下げるためのパイオニアになり、協力して働く「協働」というよりも、多くの違いを認識・理解しつつも、それぞれが尊重され、対等な関係で働くような「共働」により、well-beingの達成の契機を担うことを望む。その一翼に、実社会そしてwell-beingと関連の深い「食」と「栄養」の視点から、栄養教諭が躍動し児童と教員共に「個別化した自立」の達成の一助となることを期待している。

注

注¹ well-being を構成する 5 つの要素とは、心地よい、楽しいという気持ちである Positive emotion, 何かへのめり込み没頭する Engagement, 何かをやり遂げて達成や成功を味わう Achievement, 家族や友人などの社会的な関係を良好に保つ Relationship, そして要素の中で最も重要な、生きがいや自身が活着ていることに意味がある、意義のある生活を過ごしていると感じる Meaning のことである (Seligman, 2014)。

注² 性格特性的「強み」の把握は、ペンシルベニア大学のホームページ (<https://www.authentic happiness.sas.upenn.edu/>) にて、無料かつ日本語でテストが実施可能であり、子供用の「強み」テストもある。

文 献

- 青木孝文, 合田喜賢, 塩津敦子. (2023 年). 栄養教諭と担任が共働する小学校家庭科授業の提案—well-being の観点をういた「生きる力」を育む小学校 5 年生の年間指導計画—. 川崎医療福祉大学教職課程部門誌, 1, 122-134.
- 阿部望, 石川信一. (2016 年). ポジティブ心理学における強み研究についての課題と展望. 心理臨床科学, 6 (1), 17-28.
- 上坂美紀, 中森千佳子. (2020 年). 子どもの主観的 well-being における「生活評価」指標の枠組みと指標の提案. 日本家政学会誌, 71 (10), 631-647.
- 大竹恵子, 島井哲志, 池見陽, 宇津木成介, Christopher Peterson, Martin E. P. Seligman. (2005 年). 日本版生き方の原則調査票 (VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths) 作成の試み. 心理学研究, 76 (5), 461-467.
- Christopher Peterson, 訳: 宇野カオリ. (2012 年). ポジティブ心理学入門: 「よい生き方」を科学的に考える方法. 東京, 春秋社.
- Martin E. P. Seligman, 訳: 宇野カオリ. (2014 年). ポジティブ心理学の挑戦 “幸福” から “持続的幸福”へ. 東京, ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 丸山早苗. (2020 年). 家庭科における指導を充実させるための評価の在り方とそのポイント. 初等教育資料, 999, 16-21.

- 文部科学省. (2017年 a). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 家庭編.
- 文部科学省. (2017年 b). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編.
- 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター. (2020年 3月). 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校編 家庭.
- 渡辺雅子. (2004年). 納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル. 東京, 東洋館出版社.
- 渡辺雅子. (2021年). 「論理的思考」の社会的構築 フランスの思考表現スタイルと言葉の教育. 東京, 岩波書店.